

## 仮名文書の形容詞：特色ある形容詞語彙について (その二)

辛島, 美絵  
九州産業大学国際文科学部助教授

<https://doi.org/10.15017/9366>

---

出版情報：語文研究. 89, pp.1-12, 2000-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：published  
権利関係：



# 仮名文書の形容詞

——特色ある形容詞語彙について(その二)——

辛 島 美 絵

## 一 はじめに

本稿は、仮名文書の国語学的研究の一環であり、前稿<sup>(注)</sup>の高度形容詞についての考察に続くものである。

鎌倉時代の仮名文書形容詞を研究することの意義や方法、テキスト、形容詞語彙一覧等については前稿を、古文書、仮名文書の国語学的研究の必要性や重要性については拙稿<sup>(注)</sup>を参照されたい。

鎌倉時代の仮名文書の形容詞の語彙量は、前稿で取り上げた資料と方法に基づく調査によると、約三七〇であり、以下の(I)(II)(III)の語彙から構成されている。

(I) 平安時代以前の諸資料ですでに使用されているもの(約八割)。

(II) 鎌倉時代の文献からもっぱら目に付くようになる

もの(約一割)。具体的には、

あぶなし あらけし いたいたし いたまし  
いまわし うたてし(シク) うしろぐらし  
おさあし きぶし くぼし けぎたなし  
げにげにし こざかし ことやすし  
ことゆえなし ことわずらわし さかさかし  
さたがまし しょうたいなし せんなし  
そねまし たつとし たてだてし なかなかし  
にがにがし ねたまし ねんなし のろし  
ひだるし めかしこし もつたいなし  
ゆめがまし ゆわし ようようし よわよわし  
など。

(III) 当時の文献においてもなお一般的ではないと見られるもの(約一割)。

(II) が一割を占めていることは、鎌倉時代の仮名文書が

その当代的な語彙を反映していることを示すものと思われる。また、その用例のほとんど(述ベ一四〇例中一一七例)は書状で使用されたものであり、前稿で指摘した八書状における形容詞の多様性Vを裏付ける結果となっている。書状はもともと形容詞の頻度数が高い(全形容詞頻度数の六割は書状に見えるものである)が、より高い割合でこれらの新しい形容詞が多用されていることは注意すべきであろう。書状の他には証文や上申文書にも見られるが、前稿で見た注文や売券などのような簡潔な表現が好まれる種類の文書ではなく、書状に近い形式を持つ譲状や申状に主として使用される傾向がある。

(Ⅲ)には、いくつかの種類があるが、(ア)シシ語尾の類、と(イ)従来の形容詞の音韻交替と見られる類、を除くと、

(ウ) 現行辞書の見出し語として立てられておらず、他の文献に用例を見出しがたい類

(エ) 現行辞書の見出し語として立てられているが、鎌倉時代以前の他の文献に見出しがたい類

の二つに分けられる。今回は前回報告した(ア)(ウ)に続き、(エ)類の用例全一三語(述ベ一七例)について述べる。

(エ)類と判別したのは、『日本国語大辞典』、『角川古語大辞典』<sup>(注5)</sup>ほかの辞書類において、仮名文書の該当例か、あるいは室町期以降の用例しか挙げられず、現行の索引類でみるかぎり鎌倉時代以前の他の資料の例が見出せない語である。も

ちろん、今後の綿密な調査によって、他の鎌倉時代以前の資料にも発見される可能性はあるわけだが、それでも当時の文献に一般的な語ではなかったという点は動くまい。

仮名文書がⅢ類のような語を含み持つことの意味については、これまで報告してきた副詞、動詞等における同様の例とも併せて後稿で検討することとし、ここでは主に用例の報告と解説とを行う。

## 二 用例

上記(エ)類の形容詞語彙を、いままでの報告・注釈の有无、原本の残存状況や写真・影写本等での表記確認の状況によって、次の三つに分けて列挙する。

〔一ノ一〕現時点で用例としての報告がないもの(五語、そのうち表記の確認ができたものは四語)。

〔一ノ二〕辞書の用例としてすでに採録されているもの(五語すべて表記確認済み、ただしそのうち二語は一三四七年の写本による)

〔一ノ三〕原本が残存せず確例とはしがたいもの(三語)。

なお、本文中に単に「仮名文書」と記すときは、本研究での調査対象である『鎌倉遺文 古文書編』<sup>(注6)</sup>に収録されている仮名文書のことである。

【二ノ一】

【いかがし】

①これたゞいましるしいたし候はむ。し□とかくしるに候えは、あまりにいかゞしくて、定ひか事に候らん□

△「寛元四（一二四六）年一月？」某勸返抄 春華秋月抄草一二裏文書 九卷六六一六号二五二頁 写（真）

これは勸返状、すなわち、往信の書状の行間に返信を書いて返送した書状中に見られる用例である。

往信で尋ねられた内容は、

②聞書の見たく候ハ、かし候へし。抑思かけ候ハぬ事に候へとも、京極殿師美関白にならせ給し年かう月日御年、又

家忠公大臣になり候□□かう年月日年、これの承たく候

と、宗性申候。しるし下され候哉。あす花山院八講の折、

可令申候也。恐々謹言

△「寛元四（一二四六）年一月」三〇日 為繼（？）

書状 春華秋月抄草一二裏文書 九卷六六一六号二五二頁 写真により一行目「抑思かけ候」の下に、「ハ」を補う

のようなことであるが、「聞書の見たく候ハ」については「これにハいたくみたく事も候ハて候ハぬ也」と答え、「京極殿師美関白にならせ給し年かう月日御年」については「いたくこまかにハ候ハねと大かい進候也」と答え、「家忠公大臣になり

候□□かう年月日年」には「同進之」、「あす花山院八講の折、可令申候也」には「花山八講ハ忠雅公のことおもひ候ハ、家忠忠雅にてしるし進候」「家忠公ハ五月にしにたるよしみに如何。忠雅公こそ八月廿六日やらむにしにて候へ。如何。恐々謹言」などのように逐一回答し、その後に①の文章が付されている。

用例の前後には欠損部が多いが、「定ひか事に候らん」とあるように回答の自信のなさをことわる内容であるから、この「いかがし」は「日国大」他にある「疑わしい。おぼつかない。不安である。」意を表す「いかがしい」と同語だと認めてよからう。

「いかがし」は「いかが」を形容詞化したもので、『日国大』では浄瑠璃や『捷解新語』の例が、『時代別国語大辞典 室町時代編』では御伽草子やキリシタン資料、『角川』では滑稽本の用例などの室町後期・近世期の用例が挙げられているように、文献に一般的になるのは室町末・近世になってからのようである。他の仮名文書でも、このような場合には、

③又この中におほつかなくおほしめす事候はんをは、おのつから見参にいり候はん時、申ひらくへく候。

△年未詳 源空（法然房）書状 和語燈録 三卷一四六二号一七三頁

のように「おぼつかなし」（全一二二例）等を使用している。

【いとし】

④ミやつるかしか候いとしようあはれいたひ候へ。

あに□□もをもうこと、かなへてたひ候へ。

△「弘安五（一二八二）年七月三日 いねつる願文

武蔵峰岡八幡宮藏僧形神像胎内文書 一九卷一四六

五八号三三五頁 『川口市史 古代・中世資料編』<sup>(注9)</sup>

八一頁の写真▽

これは、埼玉県川口市の峯ヶ岡八幡宮藏僧形神像の胎内文書から出てきた数十通の願文のうちの一通（全文）である。

一連の願文の書き手の人々は、鶴岡八幡宮と何らかの関係を有する在地領主層であるらしいが、二〇数点の仮名書きの願文は、装飾的な漢文や宣命体で美辞麗句を書き連ねたものではなく、④と同じく直接的に願いを書き記した短文であり、ちょうど現代の我々が初詣で手を合わせて神に祈る文句に似ている。

「いとし」は「いとおし」が変化して成立したといわれ、「かわいそくだ」あるいは「かわいい」の意味として『日国大』他の辞書類には『閑吟集』や狂言、抄物等の室町時代の例が挙げられているが、④は、直後の「あはれいたひ候へ」が神に祈る文句であることからして、

⑤（後家）「なふくいとしや、ほうずのきうくつにあらふ、わらはがいたらは、ちやつとたくれさうもなひほどに、よそへまいらふ」

△「大藏虎明本狂言集の研究 本文篇下」時「二三三頁▽

のような用法と同じで、非力のをいづくしむ気持ちを意味すると解釈される。

仮名文書全体では「いとおし」が圧倒的に多く（三九例）

④と同様に人に対する慈悲について言うときにも、

⑥このいませんのほの、たのむかたもなく、そらうをもちて候はこそ、ゆつりもし候はめ。せんしに候なは、

くにの人々、いとをしふせさせたまふへく候。このふみを、かくひたちの人々をたのみまいらせて候へは、申きて、あはれみあはせたまふへく候。∴。ひたちの人々はかりそ、このものともをも御あはれみあはれ候へからん。いとをしよう人々あはれみおほしめすへし。

△「弘長二（一二六二）年 十一月二日 親鸞書状<sup>(注12)</sup>

一二卷八八八九号三三八頁 『親鸞聖人真蹟集成』

四卷四二八〜九頁の写真▽

のように「いとおし」が用いられている。

【いまめかわし】

⑦念仏申候人々の中に、南無阿弥陀仏となへ候ひまには、無碍光如来となへまいらせ候人も候。これをきゝて、ある人の申候なる「南無阿弥陀仏となへてのうへに、くろみやう盡十方無碍光如来となへまいらせ候こ

とは、おそれある事にてこそあれ。いままめかわしく」と申候なる、このやういかゝ候へき。

△〔正嘉二(一二五八)年〕一〇月一〇日 慶信書状  
下野専修寺文書 一一卷八二九六号三〇〇頁  
『親真蹟』四卷四一二頁の写真▽

この「いままめかわし」は、「南無阿弥陀仏と唱えた上に無碍光如来と唱える」ことについての感想を表現する形容詞であるが、⑦への親鸞の返書には「南無阿弥陀仏をとなへてのうへに、無碍光佛と申さむは、あしき事なりと候なるこそ、きわまれる御ひかことゝきこえ候へ。」とあるから、よくない意味で使用されていることは明白である。

『日国大』や『角川』の見出し語には採られていないが、これは、『時代別』が「いままめかし」②(すでにわかっているはずのことを今さら取上げて言うのが、わざとらしくて、その場にそぐわない様子である。また、それに対して納得のいきかねる気持ちである)に同じ)として「はちかつぎ」の⑧(いかさまとは物のけにつき給ふか、きのふけふのことならず、はや七八ねんのことなるを、いままめかはしくいゝいてさせ給へはとて、そはなるつへをとりなをし、とのをちやうとそうちにける。

△『影印 室町物語集成第一輯』<sup>(注13)</sup>一一七頁▽  
の例を挙げている「いままめかわし」と同語であろう。⑦の書状を掲載する『親鸞集・日蓮集』<sup>(注14)</sup>でも、本文「いままめかわし

く」に対して、「わざとらしく。きざな。」(二三六頁)と注が付されている。

他の仮名文書には「いままめかし」他、右と同様の意味をあらわす形容詞は使用されていない。

【おおきし】

⑨大和国ノ悪タウワ、椀本ノ堯春房ナリ。…(中略)…。

大方ハ悪タウノ事、イツレモオトラスヲ、キク候ト申候  
ヘトモ、コレホトヲソロシキ堯春房ハ日本国ニハ、ヨモ  
御渡候シモノオ。

△弘安八(一二八五)年三月 某起請落書 大和春日  
神社文書 二〇卷一五五〇四号二九一頁 写真▽

これは、興福寺が農民に報告させたと言われる悪党についての起請落書中の一つである。<sup>(注15)</sup>「悪党の事というのは、いづれもおとらずおおきいものだが、堯春房ほど恐ろしいのはいない」という内容であるから、この「オオキク」は悪党の仕打ちの程度の甚だしさをあらわしていると思つてよからう。

「おおきい」は形容動詞「おおきなり」が形容詞化したもので、室町時代以降用いられるようになったと言われている。<sup>(注16)</sup>とくに「おおきく」の発生は遅れるとされるが、なかでも⑨のように形状ではなく程度の甚だしさを表すものは、中世以前の文献に探するのは難しく、それまでは「おおきに」を使用するのが一般的である。

仮名文書では「おおきに」は一五例使用されており、形状を言うものが四例、

⑩去五月一日寺家にくたされ候院宣に、…へきよし、おほせくだされ候あいた、寺官等おほきになけき申候て、

△年未詳 頼誉申状案 山城醍醐寺文書 一五卷一一四七三号二〇五頁 写真▽

のように、程度の甚だしさをいうものが一一例見られる。

### 【きつし】

⑪…ことの中に、いとをししくおもはんものにゆつるへし。きつく他人にゆつるへからず。

△元亨二(一三三二)年八月二〇日 道覚・道一連署

譲状 越前布施卷太郎所蔵文書 三六卷二八一四四号二六二頁▽

この例は、原本(または写真)の確認が出来ておらず不確かではあるが、ひとまず活字本における所在を報告するものである。

「きつし」は、『日国大』では抄物やキリシタン資料以下の例が挙げられているが、⑪のような陳述副詞的な用法は副詞「きつう」の項に分類され、浄瑠璃の例が挙げられている。

『角川』でも「きつし」の項の解説には「『きつしい』または『きつう』の形で近世に多く用いられる。」とあるように、主として近世期以降の展開について注目されている語である。<sup>(注17)</sup>

他の仮名文書では、⑩のような場合には、

⑫しかるあひた、次郎頼季にゆつりあたふるところなり。兄弟等の中に、またくさまたけあるへからず。

△正応三(一二九〇)年五月八日 仰蓮(相良頼俊)

譲状 肥後相良家文書 二二卷一七三四号三九二頁 影写▽

のように「またくさまたけあるへからず」や、「またくいらんをなすへからず」などの表現が用いられることが多い。

また、⑩の文書には「いれへし」という「べし」の連用形接続の用例も見られる。

### 【二ノ二】

#### 【おとおとし】

⑬魚・鳥ノアランヲ、ハウニスキテ、ヨシキリノ能カマシク食事アルヘカラス。サレハトテ、ハサキヤクヒキリテ、舌□サキニ懸テ、ナフリナントスヘカラス。男々シカラス。タノヨキ程ニ計ヘシ。

△弘長一(一二六一)年以前 北条重時消息 天理図

書館蔵一三四七年写本 二卷八七三十一号一二六頁 二七項目 『中世武家家訓の研究』資料編四〇頁の<sup>(注18)</sup>

#### 写真▽

「おとおとし」の見出し語に、『角川』では「男らしいさま」として⑬の例を挙げ、『日国大』では「いかにも男らし

い。男性的である。」として『四季物語』の例を挙げている。また、この条項は、『中世武家家訓の研究』研究編二六頁には、「魚や鳥の料理など食事作法のむづかしい料理が出て来た時には、その食べ方の作法をよく知っているからといって、あまり得意気に作法だてをして押切り押切り食べるのはよくない。さればといて鳥の羽先を喰ひ切つて舌の先でなめまわすような品の悪いまねをしてはならない。一人前の男らしくないことである。適宜にしておくのがよい」のように説明されている。

底本で「男々」に「ヲトコく」とルビが振られているのは、「おおし(雄々)」との區別意識があつてのことだろうか。<sup>(注19)</sup>調査した仮名文書内では「おおし(雄々)」の使用例はなく、「おとこおとし」も右の一例のみである。

### 【さもさもし】

⑭一、召仕ハン者、縦□マコ、ロニ□トモ、其ノ器量ニアラサラン者ニ、大事ヲ云合ス□カラス。殊ナル大事出キタラハ、其中ニサモくシク、ヲトナシカラン人アマタニ謂合スヘシ。其猶計カタクハ、重時ニカクトイフヘシ。大事ヲ無左右、我心ヒトツニ計ツレハ、何ニモ後難アル也。

△弘長一(一二六一)年以前 北条重時消息 天理函書館蔵一三四七年写本 一二巻八七三十一号一二二頁

二項目 『中世武家家訓の研究』資料編一四頁の写真▽

『日国大』では「さもさもし」の項目に「ちゃんとした様子である。しかるべき様子である。もっともらしい。」「角川」では「さも」の疊語を語幹とする語。いかにももっともと納得できる意見を持っているさま。穩健で常識的であるさま。」として、ともにこの例を挙げる。『中世武家家訓の研究』資料編一五頁の注では「サモサモシ」は副詞のさも(一)(一)そのように(二)実も、いかにも。)を重ねた「さもさも」を形容詞化した語で、げにげにしと同じ。…中略…『さもとある人』とは、人柄の重厚で分別ある人をいう。『サモサモシクヲトナシカラン人』とは人柄が重厚で分別あるおもだった人の意。思慮分別ある古老。」とし、『中世政治社会思想』<sup>(注20)</sup>三一〇頁の頭注では「人柄の重々しいありさま。」としている。

### 【なおし】

⑮又人をもわつらはさず、我心もなをしく、我とはけみて善根をして候も、佛にならぬ事もあり。

△「弘安四(一二八一)年」二月二十七日 日蓮書状 一九巻一四五三三号二八一頁 『昭和定本日蓮聖人遺文』<sup>(注21)</sup>四二〇号 日興写本 写真▽

⑯仏法をはかくすれとも、或は我心のをろかなるによ



り、或はたとい智慧はかしこきやうなれとも、師によりて我心のまかるをしらす。仏教をなをしくならいいう事かたし。

△「建治四（一二七八）年」二月三日 日蓮書状

一七卷一二九八六号二二三頁 『昭和定本』二七五

号▽

⑭せんするところ、従者主にちうをいたし、子をやにけうあり、妻は夫にしたかは、人の心のまかれるをはすて、なをしきをはしやうして、おのつから土民あんとのはかりことにてや候とて、かやうにさた候を、

△貞永一（一二三三）年八月八日 北条泰時書状 「御

成敗式目後付」六卷四三三七号三九一頁▽

ク活用の「なおし」は中古より一般的に用いられ、仮名文書にも計五例が指摘できるが、これはシク活用の例である。

⑮は日蓮の真蹟ではないが、鎌倉時代の日興による写本が残っており、その写真により表記が確認できる。

⑯は『日国大』に引用されている例である。やはり真蹟はなく、本門寺蔵の日興による写本と、京都妙覚寺蔵の真蹟の影写本が残っているが、表記は未確認である。

⑰は「角川」に引用されている例である。原本は残っておらず、康永二（一三四三）写の平林本による。ただし鎌倉後期～南北朝初期写の尊経閣文庫蔵鶴岡本の「なをくよき」のように古写本にもク活用に作るものもあるので、原本の形は

確定しがたい。<sup>(注25)</sup>

【ものまसानし】

⑱阿テ河ノ上村百姓ラツ、シテ言上。

一、：

一、チトウノマコシ郎トノ、廿ヨ人クソクシテ、百姓ノクサノイヲリニ、十月八日ヨリシテ、三日カアイタセメラレ候。カクノコトキノクシウヲメシ候カウエニ、百姓クリ・カキヲ、トノヒトヲ、ヲイノホセ、ヲイノホセトラセテ、モカキメシ候コト、モノマサナク候ナリ。

△建治一（一二七五）年一〇月二八日 紀伊阿豆河莊

上村百姓等言上状 高野山文書又続宝簡集七八 一

六卷一二〇七六号一三八頁 『中世を読み解く』一

四六頁の写真▽

『日国大』では「ものまसानし」の見出しを立て、「何となく不都合だ。あまりよくない。また、何とも見苦しい」としてこの例を引用している。

「もの」は、「なんとなく」「そこはかとなく」を意味する接頭辞であるが、河野通明氏が「二百膳にも及ぶ食事の強要のうえに、栗・柿を一つ残らずもぎとってしまうことの非常識さを非難したもので、『何とも非道の極みです』というような感じであろうか」と述べ、石井進氏も「正気の沙汰ではない、とんでもないことです」と解釈されているように、⑱の

例では「モノ」は「なんとなく」という実質的な意味は保持していないようである。

「まさなし」は当時一般に用いられる形容詞であるが、「もの」を冠した例は見つけにくく、この語が「物申サ無」等と誤解されたのもそのあたりに理由があるのだろう。<sup>(注29)</sup>

【ゆめゆめし】

⑱ ゆめかましく候へとも、あふき三本進候。又く恐候ほと  
□は候はんと、まいらせ候。尚くゆめくしく候事、恐  
入候。恐く謹言。

△年未詳五月一日 金沢顕時書状 金沢文庫文書  
二四卷一八三九七号七四頁 写真▽

⑳ 時にゆめくしく候へとも、ようとう五ゆいまいらせ  
候。これにて、御ときさハくらせ給候て、そうちうにま  
いらせさせ給候て、御て、かけうやうして給ハリ候へ。  
これハ四郎太郎かとふらひ候ふんにて、候へく候。

△年未詳 某書状 金沢文庫文書 三二卷二三四五六  
号一頁 写真▽

㉑ 又ゆめくしくさふらへとも、ちや一つ、みまいらせ  
候。さたゆきかもとよいたひて候。ようや候らんと覚候  
て、まいらせ候。猶くゆめかましき、わひしく候て、  
あなかしく。

△年未詳 金沢貞顕書状 金沢文庫文書 三八卷二九

四二八号八四頁 写真▽

すべて、金沢文庫文書の書状の例である。「日国大」の「ゆめゆめし」の項には(1)「夢のようである。夢のように当てにならない。」として浄瑠璃の例が、(2)「きわめてわずかである。はなはだ軽少である。」として上の㉑の例と、『御湯殿上日記(文明一六年九月二日)』、『日葡辞書』の例が挙げられている。また、「さ」を下接した、

㉒ 御ちや一つ、みまいらせ候。ゆめくしき、返くもひん  
なくおほえさせをハしました候。此やうを申させ給へく  
候。あなかしく。

△年未詳 禅阿書状 金沢文庫所蔵西域伝堪文裏文書  
三八卷二九六七号一八九頁▽

のような例も金沢文庫古文書に見えるが、原本(写真)の表記は未確認である。

「ゆめゆめし」と似た語に上の⑱や㉑の波線部の「ゆめがまし」があり、やはり金沢文庫古文書の書状に、

㉓ おほ [ ] izzれもあまりにくゆめかましく候  
に、このたひはおひたしくたまはり候へと、おほせ事  
さふらふへく候。

△年未詳 金沢貞顕書状 三九卷三〇三〇五号七五頁  
写真▽

の例など計三例が見えるが、こちらは鎌倉時代の文献では『発心集』に用例がある。「ゆめゆめし」も「ゆめがまし」も

『日葡辞書』では、ともに「婦人語 (Palavra de moheres)」とされている。<sup>(注30)</sup>

【二ノ三】

【すこし (シク活用)】

⑳ はらのけの候しか、春夏やむことなし。あきすきて十月のころ、大事になりて候しか、すこしく平癒つかまつりて候へとも、やゝもすればをこり候に、…

△ [弘安一 (二二七八) 年一月二十九日 日蓮書状

『昭和定本』三一八号 一八卷一三二九九号二九

頁▽

これは、シク活用形容詞「すこし」の存在にかかわる重要な例であるが、真蹟欠部である。

【なげかわし】

㉑ 実果の成せん時、いかかなげかはしからすらん。

△ 文永九 (一二七二) 年三月二〇日 日蓮書状 一四

卷一〇九九七号三六二頁 『昭和定本』一〇〇号▽<sup>(注31)</sup>

『日国大』は「なげかわしい」の項に、滑稽本や近代の例とともに㉑の例を挙げるが、真蹟は残っていない。

中古より例の多い「なげかし」の方であれば、日蓮書状に一二例、他の書状に五例が見られる。

【ほそながし】

㉒ 太刀に顔をうつせるもの、圓かなる面をほそながしと思ふに似たり。

△ [建治二 (一二七六) 年閏三月五日 日蓮書状 『昭

和定本』二二四号 一六卷二二二九五号二四一頁▽

名詞・形容動詞の「ほそなが (細長)」や、形容詞「細し」「長し」の存在に照らしても、「ほそながし」が当ても存在していた可能性は高いと思われるが、真蹟は残っていない。<sup>(注32)</sup>

『日国大』では、「ほそながし」の項に『日葡辞書』や『狂言記』以下の例が挙げられているが、室町期の資料では『倭玉篇』の写本である『玉篇略』(享祿五 (一五三二) 年写) などにも見える。

### 三、おわりに

以上、鎌倉時代以前の文献には珍しいと認められる語形の形容詞について報告した。

原本 (写真) で確認できたのは計九語であるが、鎌倉時代の仮名文書の形容詞語彙約三七〇中の九は、やはり無視できない数値といふべきだろう。意味や用法での新しさも考慮に入れるとその数はさらに増える。

また、述べ語数で考えると、確例一一例のうち八例は書状中に用いられており、残りも書状的な上申文書と願文中に見

られるもので、「はじめに」で述べたⅡ類の鎌倉時代の形容詞語彙の現れ方と一致する結果となった。

注1 「仮名文書の形容詞」(一)～(四)〔九州産業大学国際文化学部紀要〕一〇〇～一〇三 一九九七年一月・一九九八年三月・七月・一九九九年一月

- 2 「古文書による国語史研究序説」『豊太閣真蹟集』について  
——〔文献探究〕二二 一九八三年七月、「古文書語彙の性格—副詞を中心として」〔語文研究〕五七 一九八四年六月、「国語資料としての仮名文書—鎌倉時代のオ段長音の開合と四つ仮名の混乱表記を通して」〔国語学〕一四六 一九八六年九月、「国語資料としての仮名文書—鎌倉時代の二段活用的一段化例、ナ変の四段化例等をめぐって」〔奥村三雄教授退官記念国語学論叢〕桜楓社 一九八九年六月、「国語資料としての仮名文書—助動詞をめぐって」〔古代中世史論集〕吉川弘文館 一九九〇年八月、「古文書における『る・らる(被)』の特色」〔語文研究〕七一 一九九一年六月、「仮名文書の助動詞—「す・さす」「しむ」—」〔九州産業大学教養部紀要〕三〇ノ二 一九九三年二月)他。  
3 「仮名文書の形容詞—特色ある形容詞語彙について—」〔日本学論文集〕中国人民大学出版 二〇〇〇年九月刊行予定)、「仮名文書の形容詞—シシ語尾形容詞—」〔国語国文〕七九〇 二〇〇〇年六月)  
4 小学館、一九七九〜八一年、縮刷版第一版。以下、『日国大』と略記する。  
5 角川書店、一九八二年〜一九九九年、初版。以下、『角川』と略記する。なお、本稿では見出し語の表記は現代仮名遣いに

統一して引用する。

- 6 一〜四二巻、竹内理三編、東京堂出版、一九七二〜九一年刊。括弧中の巻・号・頁は、特に断らない限り『鎌倉遺文』のそれであり、「写真」「影写」等とあるのは、それぞれ古文書の写真、影写本で表記を確認したという意味である。以下同じ。  
7 三省堂、一九八五年〜二〇〇〇年。以下「時代別」と略記する。  
8 川口市、一九七八年二月。  
9 千々和到「峰岡八幡宮僧形八幡像胎内納入文書について」〔史学雑誌〕八一ノ六 一九七二年六月)  
10 池田廣司・北原保雄著、表現社、一九八三年九月。  
11 法蔵館、一九七三〜七四年。以下、『親真蹟』と略記する。  
12 松本隆信編、汲古書院、一九七〇年二月。  
13 名畑應順・多屋頼俊校注、岩波書店(日本古典文学大系八二)、一九六四年四月。  
14 「黒田俊雄著作集 第七巻」(法蔵館、一九九五年一〇月)九頁。  
15 大安隆「形容詞「大きい」の系譜」〔国文学(関西大学)〕一六 一九五六年六月)他、参照。  
16 彦坂佳宣「洒落本の語彙」(明治書院、『講座日本語の語彙五・近世の語彙』一九八二年六月)、増井典夫「近世後期における形容詞「きつい」の意味・用法とその勢力について」〔淑徳国文〕三二号 一九八九年二月)など。  
17 寛泰彦著、風間書房、一九六七年五月。  
18 本文中にルビがついているのは全四三三条中、第三条の「聞キ悪クシカリヌ」、第七条の「劣レナル人」、第八条の「坐カ下ノニモアラシン」、第一六条の「人ニ勝ルナリ」、第三三条の「静シタル座

- 席、第三〇条の「取者ノ大刀」、第三二条の「着タル物」、第三三条の「第一ノ短□□」、第三五条の「ケヒタル詞ツカヒ」、第三六条の「若モノキタル」「若人ノ年ニモニヌ」である。石井進校注、日本思想大系二一、岩波書店、一九七二年二月。
- 21 立正大学日蓮教学研究所編、総本山身延久遠寺、一九五二—五九年刊。以下『昭和定本』と略記する。
- 22 『富士大石寺藏日興上人御筆 日蓮大聖人御書』（妙真寺、一九八七年一月）二五頁。
- 23 古典保存会複製本（一九三〇年）による。
- 24 尊経閣叢刊の複製本（一九三一年）による。
- 25 『中世法制史料集 第一卷』（一九五五年 岩波書店）や、『同別巻』（一九七八年 岩波書店）、『大日本史料 第五編之八』（一九三一年 東大出版会）によると、南北朝頃写かといわれる竜門文庫藏『唯浄裏書』（御成敗式目の註釈書）では「なをしき」となっているらしいが、鎌倉中期写の菅孝次郎氏藏本では「なをき」であるらしい。
- 26 石井進著、東京大学出版会、一九九〇年十一月。
- 27 『阿氏河莊百姓カタカナ言上状全釈試案（二）』（『歴史地理教育』三八二、一九八五年五月）六一頁。
- 28 （注26）一五三頁。その他、黒田弘子『ミミヲキリ ハナヲソギ』（吉川弘文館、一九九五年三月）五七頁なども参照。
- 29 『清水町誌 史料編』（清水町、一九八二年九月）七九頁。中村研『地頭非法と片仮名言上状』（稲垣泰彦編『荘園の世界』東京大学出版会、一九七三年三月）二三〇頁、同『荘園支配構造の研究』（吉川弘文館、一九七八年七月）二八頁なども参照。

30 森田武『日葡辞書提要』（清文堂出版、一九九三年一月）三六一頁

31 『昭和定本』では「なけかはしから」の下に「ん」がある。

32 一六世紀ごろの写本である本満寺本の写真（本満寺御書上）、本山本満寺発行、一九六六年一月）では「太刀二面ヲ移セル者ノ圓ナル面ヲ校ソ長シト」（八七頁）とあるのが確認できる。

【付記】『富士大石寺藏日興上人御筆 日蓮大聖人御書』の閲覧に際しご高配を賜りました日蓮正宗本地山妙真寺の中村烈道氏に厚くお礼申し上げます。

（からしま みえ 九州産業大学国際文化学部助教授）